芸術

小出麻代 インスタレーションをWEB公開

「しまは文化は」 新型コロナ

個展中止受け会場撮影

新型コロナウイルス感染拡大に伴う3月の個展中止を受け、美術家の小出麻代が展示風景を撮影した約10分の映像作品を自身のホームページ（https://www.mayokoide.net/katashiro）で発表している。会場は京都府南丹市で400年近く酒造りを行ってきた「八木酒造」。ささやかな光や音を使い、場の固有性をにじませたインスタレーションを手がけてきた小出は、「その場で見てもらうのが一番いいとは思いますが、今、私にできることはやれたという前向きな気持ちが強い」と心境を明かす。

美術家、小出麻代の個展「形代」の展示風景＝麥生田兵吾氏撮影

酒造に浮かぶ時と人の重層

映像は遠くから聞こえるサイレンの音とともに始まる。暗闇の中、明滅する電球の光で浮かび上がる風景。ミラー加工が施された言葉たちが、壁や木板の上をさりげなく飾る。言葉は酒造に関わった人に自らインタビューして集めた。「主張しすぎず、場所や物になじむように意識した」。したたる水の音や、ガラス戸に反射する柔らかな光。聴覚や視覚をくすぐるつつましい仕掛けが、酒造としての役割を終えたこの場に新たな彩りを与える。

長い時を経て増改築された建物に初めて足を踏み入れた時、「古い時間と新しい時間がミックスされているのが面白いと感じた」。同時に、丁寧に整頓された酒造りの道具や機械に目が留まった。「この場所で仕事をしていた人々の振る舞いを写し取っているように思えた。今存在しているものから、当時の日々の生活を想像するための展示にしたいと考えました」。「代わりになる物」を意味する「形代（かたしろ）」を展覧会名にした。

大学で版画を学んだ小出はレイヤーや反射など重ねたり写したりする行為を作品に反映させる。「単体であるより、関係することでよりよく見えてくる何かがあると思う」。作家の視線は一見、平板な景色の、その奥底に流れる重層的な時間や人々の関わりを捉えて離さない。ちなみに、映像の冒頭と最後に流れる音は現在、この街で流れている正午のサイレンと午後5時のチャイム。予定していた個展の開館時間に合わせたそうだ。

【清水有香】